

素竹一言

五十一号より

日脚伸ぶ夕日がっなぐ街あかり
夕日がっなぐ街あかり：とは詩的情緒に溢れた表現。美しい光景ですね。日が伸びてきていることを「夕日」に実感する作者です。

天道虫転びさうなる番ひかな
どちらかといえば人に好かれる天道虫。形も模様もかわいらしいですね。この句は二匹です。「転びさう：」とまあ愛らしい表現、様子が目に浮かびます。

同じ波再びは来ず春惜しむ
サーフィンなどやられているのでしょうか。波に対する強い思いが感じられます。季節によって違う「波」と、それを惜しむ心。山育ちの私には「海」は憧れです。
藤房の水に映りてゆれにけり
風のなく、揺れない藤房を見ていた作者。ふと水面に目を映すと、緩やかな漣に藤房が揺れています。省略の利いた単純な表現に好感を持ちました。

色変りつつ朴の花まだ香る
この「色変りつつ：」とはさびびて朽ちてゆく色。目に見えるものと、鼻で感じるものの違いに心動かされた作者。豊かな自然と、その不思議を感じます。

母の日や片身に袖を通しけり
季節の「母の日」が多くを語っています。

母が亡くなって暫くの月日を置いた母の日。そこそこの気持の整理のついた作者が想像できます。

葉桜の影を育ててをりにけり
満開の桜のころも知っている作者。桜の花の影と、若葉の頃の影と、そして葉桜の影。それぞれの影の違いを想像させます。

キッズランド

さくらの木夏はわかばのまんかいだ
そうですね。夏はわかばがいつぱいです。元気な木のようにすがみえてきます。

七時まで空が明るい夏の夜
ほんとですねえ。それまではすぐ夜になつて暗かつたのに、「七時まで：」明るいとはびっくりしますね。地球はおもしろいですね。

以上

メール句会

5月分互選結果

誠哉選

特選

母の日や思い出の杖使い初む
個人えの思いがしみじみと伝わってきます。温かい心の動きに共感を覚え頂きました。

普通選

築一年出入り許され燕の巢
青梅の熟すを待てる皮算用

未摘花選

特選

目くばせに確かめ合える時鳥

かきむすめ

季節感溢れる句会ですね。時鳥が身近におりま
せんで故郷の山畑で聴いたのを懐かしく思い出
しました。居合わせた人との情景も詠まれ特選に
しました。

揚舟の輪中家屋や五月闇
母の日や思い出の杖使い初む

普通選

東原選

特選

寒き夏肌着あれこれ定まらず
気候不順な年で暑かったり寒かったりで着るも
の定まらず困り果てている様子が句に良く表れ
ています

普通選

小町選

踊子草おどり疲ること知らず
初鰹大きな口が卓囲む

特選

小町選

胸張つて深呼吸して今年竹

岳

竹林の中に佇むと、本当に清しい気持ちにな
り、心が洗われたようになります。作者も竹も深
呼吸をすることで、体に元氣を取り込んでいる様
子が伺えました。

普通選

青梅の熟すを待てる皮算用

築一年出入り許され燕の巢

岳選

特選

母の日や思い出の杖使い初む
その昔母の日に贈った杖、その杖を使う年齢に
なった、懐かしさと時の流れを感じさせられます

普通選

男手で肌着をたたむ薄暑かな
大盛りの薬味で見えぬ初鰹

みさほ選

特選

傾いて伸びる筍意志のあり
みんなまっすぐに伸びている筍の中に他のもの
とは違った意志を持ち傾いて伸びているものがあ

特選

傾いて伸びる筍意志のあり
みんなまっすぐに伸びている筍の中に他のもの
とは違った意志を持ち傾いて伸びているものがあ

小町

つた。筍にも意志があるのだという感覚が素晴らしい。

普通選

目くばせに確かめ合える時鳥

かきむすめ

公徳選

大盛りの薬味で見えぬ初鰹

公徳

特選

朴の香に包まれ神の棲む木立
朴の花の香に誘われ神が姿を現す木立と読む作者素晴らしいです。!

みさほ

誠哉

岳

普通選

独り居の物憂き午後や夏ぎざす
胸張って深呼吸して今年竹

空蟬選

大盛の薬味で見えぬ初鰹

公徳

特選

初鰹を美味しく食べようと薬味をふんだんに盛った卓が眼に見えるようです。初鰹もかなり大きいのではないかと・・・

みさほ

愛

普通選

朴の香に包まれ神の棲む木立
踊子草おどり疲るること知らず

美伊選

東原

特選

ときめきと初々しさを谷若葉
平明な表現で、若葉に賭けた想いのようなものを感じさせ、良い句だと思います。

岳

公徳

以上

前橋ホトトギス会六月例会 六月六日

互選結果

伊藤 涼志選

草矢打つふるへし手より真しぐら

久女

緑陰の招きし客となりにけり
緑陰の一部分だけ借りてをり

すみれ

涼美

少しづつ緑陰動き真昼時
利根目がけみんなして打つ草矢かな

房枝

竹内 友子選
二つ目の橋を消したる夏霞

房枝

噴水の届かぬ夢を天空に

とし子

唯野 千代選
考へる角度に日傘傾ける

房枝

万緑の中煌めける利根の帯

貴子

田村みつこ選
薫風やふとまどろみみてみし岸辺

房枝

弱々し自作の草矢足もとに

久女

角田 房枝選
万緑の中煌めける利根の帯

秋野

草矢の葉選ぶ一つの技ありし

みつこ

並木 秋野選
緑陰の一部分だけ借りてをり

秋野

糸蜻蛉川面の光り強すぎて

とし子

成田 圭子選
噴水の人喜ばず高きかな

貴子

糸蜻蛉青味泥浮く池の黙

貴子

星野 久女選
流れまで飛べと草矢に言ひ聞かせ

涼志

水音に細波に去る暑さかな

みつこ

吹き上げを操つてゐる風の神

涼美

噴水を浴びて石組み息を吹く

房枝

真鍋 貴子選
糸蜻蛉川面の光り強すぎて

涼美

川風にここは死角や夏帽子

博子

吉田 鈴江選
弾きては己が影消すあめんぼう

博子

川波に紛れてゆきし草矢かな

鈴江

星野 久女選
弾きては己が影消すあめんぼう

涼美

何といふ長さよ蜘蛛の糸張れる

友子

自句自薦
名知れず草加はりて風薫る

涼美

足下の砂を洗ひし水涼し

圭子

噴水の人喜ばず高きかな

涼美

水輪歪ませあめんぼう動き出す

富子

糸蜻蛉青味泥浮く池の黙

涼美

名知れず草加はりて風薫る

鈴江

全身はまだ濡れてゐる水遊

涼美

回想の少年の日へ草矢射る

秋野

二つ目の橋を消したる夏霞

涼美

小指刺す茨の花の白さかな

まちな

暴れ出す大噴水の勢ひかな

涼美

眩しさに紛れてしまふ糸蜻蛉

千代

草矢射る己に向けし矢となりぬ

涼美

水馬姿の失せて影の舞ふ

千代

草矢の葉選ぶ一つの技ありし

涼美

緑陰に入れば離せる悩み事

秋野

湿りなき暑さに心地よき川辺

涼美

緑陰に抱き寄せられし空と水

博子

むらさきの風になりたるカキツバタ

涼美

水襖で噴水の降ってくる

圭子

弾きては己が影消すあめんぼう

涼美

草矢射る渦巻く河の渦の中

千代

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼美

相沢 富子選

千代

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼美

時折は母に手を振り水遊

圭子

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼美

回想の少年の日へ草矢射る

秋野

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼美

噴水の求め続けてゐる形

涼志

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼志

鈴木 涼美選

涼志

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼志

流れまで飛べと草矢に言ひ聞かせ

涼志

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼志

竹市まち子選

涼志

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼志

浜茄子や口紅変へてみやうかな

とし子

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼志

田口 莉子選

とし子

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼志

対岸へ夢を求めて夏の蝶

涼志

水底を影が這つてゐるあめんぼう

涼志